

資料5 【実施上の12の留意点】のさらなる論拠

①共通したサインづくりを

生徒全員が学習の場に来たとき、黙って静まり注目できるサインを学年団の教職員で共通して持っておく。このことを徹底させていくことで、教科授業や、「集団で語り合う人権学習」とは違った学習の場でも、一つのサインで集中させることができ、その後の学習へ落ち着いてスムーズに移行させることができる。

授業に臨むとき、子どもたちの注目を集める必要がある。それが常に、どの教員も同じようにできる状況があれば問題はない。ところが、現実にはしっかり聞かせられる教員もいれば、そうでない教員もいる。なかには、手綱を緩めたり引き締めたりを自在に扱える教員もいる。いずれにしても、話を聞かせずに授業や「集団で語り合う人権学習」が成立することはない。そこには日ごろの授業のありのままの姿が現れる。聞かせ方を会得できている教員と、そうでない教員との違いはどこにあるのだろうか。

子どもたちの注目を集められないときによく見られるのは、ネガティブフォーカスの言動である。できることならそのような状況はつくりたくないし、そのような言葉は使いたくない。使ってしまうことで、場の雰囲気が悪くなり、それ以降の学習が取り組みづらくなるからだ。ネガティブフォーカスの言動を使わずとも授業が始められ、注目を集められるようにしておきたい。そのためにも、学年で共通したサインを持っておくことは必要であり有効といえる。

②まなざしは生徒に

「集団で語り合う人権学習」は、学年団という大人数による大きなTTの場と考え、その場に参加する教職員全員が授業者であるという認識のうえに立つ。したがって授業中、進行している授業者以外の教職員は、生徒に注目しながら授業に臨む。それは生徒のおしゃべりや居眠り、注意散漫を指導するというのではなく、生徒が今何を考えているのかを考えることから始めるということである。また、支援することにより発言できそうな生徒には、積極的に励ましのアプローチを行う。他の教職員が発言することで授業者をサポートすることもできる。前に立つ授業者に任せきりにせず、「自分の授業だ」という認識で生徒へとまなざしを向ける。

■ 「先生は周りで、遊んびよるやつがおらんかとか、寝よるやつがおらんかとか、そういうのも含めたうえで周りにいっぱいおったんかもしれんけど、生徒の立場からしたら、なんでこんな重たい空気の中、こんなしんどいものをせなあかんのんかっていう、そこにしか意識はいつてなかった。その当時は。」(板野中学校全体学習10~12年目・人権を語り合う中学生交流集会 20代男性 KY)

「集団で語り合う人権学習」の授業を行うとき、授業者以外の教職員が、生徒と同じように授業者や発言する生徒に注目する場面が見られる。ときとして授業者や生徒の発言に引き寄せられ、ついつい注目してしまうこともあるが、基本的に視線は、TTとして生徒に向けられるべきである。そしてそれは、監視的にならないことにも留意しなければならない。私語や居眠り、注意散漫に対して軽い声かけをすることはあっても、厳しい監視であってはならない。そうすることで、生徒は萎縮し、より一層発言や授業、人権学習に対してマイナスイメージを刷り込んでいくことになる。あくまでも授業参加している生徒がプラスイメージがもてるようにアプローチすることである。まなざしを向ける生徒のなかには、教師のアドバイスやサポートを欲するケースもある。そのときには要望に応じた対応を行うとともに、より授業に積極的に参加できるような励ましや勇気づけを行う。

また、TTである以上、その場に参加している教職員すべてが授業者であることから、積極的に挙手し、授業者のサポートを行うことである。生徒は、教職員が思う以上に、教師の発言に注視している。それが、教職員同士のやりとり

となればなおさらである。あたたかい見守りのまなざしを生徒に向けるとともに、共に学んでいる学習者としての姿勢をもつことである。

③振り返りと本時の流れを共通理解

授業のはじめには、これまでの学びの振り返りと本時の学習の流れを全体で共通理解したうえで進めていく。このとき、授業者の話や、生徒の発言による振り返りなどにより、授業の流れがスムーズになるような雰囲気づくりを行う。

■「語り合いは、とにかく発言から始まることであるので、黙ったままの重い空気を破って始めてくれる子の存在がないと前に進まない。最初の揺さぶり、投げかけに苦労した。(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 60代女性 Y 教員)

授業をどのように始めるかは、想像以上に厄介な問題であり、その導入に四苦八苦する授業者を多く見かけた。結果として、授業者が一方向的にしゃべるだけしゃべることで生徒の緊張感が逆に高まり、何を発言すればいいのか分からなくなり、授業冒頭から膠着状態になることもあった。ただ、いつの授業も同じルーティーンとして、授業のはじめはこれまでの学びの振り返りをする。それを、ウォーミングアップ的に生徒から発言してもらおう。その内容を材料として授業をスタートさせていくという流れを、毎時間の人権学習や「集団で語り合う人権学習」にしてしまうことである。スムーズに授業に入っていけるような自分なりの雰囲気づくりの手法をもつことである。

④発言は自由意志で

生徒の発言は、基本的に生徒の協力的・主体的な自由意志を主とする。授業者と生徒の人間関係ができていれば当てることもあり得るが、注意しておかないと生徒の人権学習に対する意識に悪影響を及ぼしてしまうことになりかねない。発言がない中で授業を進めることは困難であり、発言を促したいところであるが、発言できずに黙っている生徒も内心揺れていると信じ、我慢強く授業を進めていく。

また、勇気をもって一人が手を挙げたとき、飛びつくようにすぐに当てない。勇気ある挙手により、他の生徒も手を挙げやすくなる可能性がある。他にも発言する生徒がいないかどうか、さらに問いかけを行う。その待っている少しの時間が、手を挙げている生徒の気持ちを落ち着かせてくれる。

■「当時は思わなかったが、意見を言いたくない子ども周りに合わせて言っている節があった。(全員が発言をしななければならない空気の時は特に)(応神中学校合同人権学習3～4年目・人権を語り合う中学生交流集会 20代女性 A Y)

■「発表はしなくても考えを巡らしていたことは確かである。黙っていて発言はしなくても、クラスの他の子たち同士のやりとりに、かなり心を動かされていた。」「気をつけていたこと、それは周りがどんどん発言する中で、追い込まれて無理矢理発言するようなことはさせない。私がそうされて発言するのが嫌いだからである。自らのわき上がる思いでの発言でなければ、まわりにも響かない。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 60代女性 Y 教員)

■「あの時している者として、ひっかかるところが2つあった。それは何かというと、1つは、しんどいことをしゃべるといのは、ものすごくエネルギーがいるのに、教師としてそれを皆の前でやっぱり話さそうとしてしまうのね。話したいという気持ちが高まって話すのじゃなくて、話さそうとする自分があるわけね、授業を成立させるために。しかもそれが体育館、全体学習だったときが体育館だったからなんやけど、ホンマにしんどいことって、ホンマの親友にもなかなか言えない、最後の一線が許されたときの人にしか言えないことを、あの当時生徒に求めてたことのせこさがあったので、それを求めさせることのしんどさって、ずっとずっと感じとったのは事実。」「やっぱり本音で言うってことには時間がかかる。一個ポロッとと言えるかどうか。その一個ポロッとと言

えたときには、絆がグッと深まるんやけど、その一個のポロまでは、こちらからも強制もしないし求めないので、
すごく時間がかかる。先生の言よった、きれいな事ではダメだって、そのことはすごくクラスの中でも分かるんや
けども、でもそうならないきれいな事にならない集団づくりのためには、ほとんどの教員は、〇〇先生や吉成先生
じゃないよ、ほとんどの教員は、きっと時間と段階がかかるんだろうなって。」（板野中学校全体学習・人権を語り
合う中学生交流集会 50代女性 F 教員）

■「全体学習で発表するのではなく、クラスの中で発表したいという生徒も大勢いた。クラスでは言えるけど、全
体学習では言いたくないと言って、表面的な発言はしたが、自分の心の中を話すことはなかった。みんなの前で
言うことで、何かが変わるのだろうけど、受け止めてくれる雰囲気があれば言えるのではないだろうか。」（板野
中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 40代女性 I 教員）

■「自分は発表をしなくても、発表した仲間と同じ思いであれば安心できホッとする。私は決して多く発表した生
徒ではありませんでした。発表を沢山している仲間は大体にして同じ仲間だったように思います。勇気を振り絞
り初めて発表する仲間がいると教室の全員が聞き入った。涙を流しながら心の内を語った仲間は発表後には穏や
かな表情をしていたことを覚えています。」（板野中学校全体学習 1～2 年目 30代男性 TM）

■「前段の「授業」の部分が導入のようなもので、それが後段の「全体で想いを語り合う」部分のためのものであ
るような、そういう感じを受けていました。なので、初めの頃は形式に沿って「見せる授業」をしている感覚で
したが、次第に「語りたい人が、語りたいことを語る場」として、生徒自身が主体となってすすめる時間になっ
ていたと思います。」「教師から生徒へ発言して欲しいというような雰囲気を感じなかったわけではありませんが、
当時の私は、発言したくない人はしなくてもいい時間、無理に語らなくてもいい時間だとも感じていました。そ
れはこの学習が、他の教科学習とは違う、自分たちでどう進めるか決めていい時間だと感じていたからかもしれ
ません。ただ、他の生徒がどういう風感じていたのか、発言をプレッシャーに感じていた生徒や、同級生の意
見に興味がなく、無駄な時間だと思っていた人もいたかもしれません。」（板野中学校全体学習 2～3 年目 30代女
性 OC）

■「クラスづくりの中で、多数決とかでなくて、一人一人の意見を最後まで聴くとか、席とかも変なグループでや
って、みんなが話ができるようになってた。男子と女子で分かれるわけでもなく、女子の中でも活発な子とあま
り話せない子でグループが分かれるわけでもなく、うまく大きいクラス集団としての輪ができてからこそ、自
分の気持ちが言えたと思う。全体の中で話ができなくてもグループで話し合ったときに話ができるのも、この子
だったら分かってくれるだろうなって、うまく自分の気持ちを言葉にしにくい子でも自分がホンマに言いたいこ
とをこの子だったら分かってくれるなっていうのがあるから言えたと思うから、そういうのがなくていきなりと
いうか、形だけみんなの前で自分の気持ちを言おうみたいなのになると、かなりのリスクがあるから怖い。」「あ
のときは、自分は言える方だったから、「なんで言えんのだろう」「自分の思ってることをただ言ったらいいだけ」
「誰が何思ってもいい」みたいな感じで思ってたけど、それが言えない子がいて、けど言えないからって何も考
えてないわけでもないっていうのも、全体学習の中で、クラスの中で、学活とかしたりとかいろんなことがある中
で、そういうのが分かってきた。「なんでいつもあの子道徳のとき寝てるんだろう」とか、「なんで言わないんだ
ろう」みたいな、「なんでほとんどの子がいいって言ってるのにあの子だけ反対してるんだろう」とか。それを、
学校生活の中で気づいていく、「そうなんじゃよ」って大人が言うんでなくて。」（板野中学校全体学習 4～6 年目
30代女性 AZ）

■「クラスでの話し合いや全体学習を通していくなかで、徐々にその中身と言うか実状を理解していき、自分には
何ができるのか、どうあれば良いのかを考えるようになりました！はじめは綺麗事しか言えなかった自分も、幾
度も話し合いを重ねていくうちに、「そうじゃない、ほんまの自分でぶつからないとみんなと分かり合えるはずが
ない」と察し、怖さや恥ずかしさを乗り越えて恐る恐る語ったものです。どんな話題にせよ、人それぞれの思い
や意見があり、それを賛同したり反論したり。。ぶつかり合いながらも理解し合えた時、仲間との絆が強くなっ
ていったようにも思います。」（板野中学校全体学習 5～7 年目・人権を語り合う中学生交流集会 30代男性 AK）

■「全体学習の場を、最初は、「自分の意見を言うなんて恥ずかしい」「何て思われるんだろう」とか、そういうこ
とを考えていたように思う。でも、時間を重ねるごとに、あの場では皆真剣に聞いてくれていたし、笑う者は誰
もいなかったと思うし、唯一同級生の前で真剣に語り合える時間が、時に待ち遠しいと思った時もあったかな。」
「全体学習を通して、自分の意見を言うことは恥ずかしくないって思えるようになったし、きれいごとかもしれ
ないけど、きれいごとを考えてるときは少なくともそうなればいいな、それが良いことなんだって思ってるんや
からきれいごとの何が悪い？って私は思う。きれいごとのひとつも考えられないよりはよっぽどいい。いろんな
ことを考える時間、いろんな人の考えを聞ける時間ですごい貴重なことやなって思う。」（板野中学校全体学習 8
～10 年目 30代女性 UC）

■「同級生が涙しながら話している姿に応えようとしていた。しかし、皆が本音を語っていたかはわからない。」「思
春期に友達の考えを聞くことができたのは貴重だった。」（板野中学校全体学習 8～10 年目 30代女性 SY）

■「あの場所でみんなで色々なことを考え、意見を言い合ってたことが、今の私の基礎を作っていると思います。」

13歳から15歳の多感な時期に、自分の意見を人の前、しかも大勢の前で話したことで根性が出来たと思うし、自己主張の力もついたと思います。私は活発な方ですが、最初の頃は、周りの子たちに発表したり、自分のことを話すことで、どう思われるか不安でしたが、そのうちに、恥ずかしさや不安な気持ちより、「私の気持ちや思いを伝えたい」と思うようになってた気がします。」(板野中学校全体学習8～10年目 30代女性 MD)

■「あの場の雰囲気、何か言わなくては」という思いもあり、誰かの発言に共感や反感を持ち、それを自分を認めてくれている友達以外の大勢の場で発言するのはとても勇気がいったが、何か言えば先生なり友達なり誰かが返してくれるのが嬉しかった。発表に慣れてくると、誰か共感者がいる思い、心強く大勢の場で話すのが心地よく思う時もあった。先生の目がこちらに向き再び期待に応えようと、何か喋ろうと考えたりする事もあったが、それが苦痛な時もあった。また、消極的な子は全体学習や授業がとても苦痛で、休み時間に嫌だと言う声もあった。少人数(友達内)でなら意見も出せるが、クラス内でも発言するのが苦手な子はいた。」(板野中学校全体学習8～10年目 30代女性 NE)

■「小学生の頃の私は、前に出るのが苦手で、失敗を恐れ、消極的な性格でした。しかし、中学生になって全体学習と出逢い、自分と同じ立場のクラスメイトが自分の思いを率直に語る姿を目の当たりにし、次第に自分の中で何かが変わっていきました。初めは、「自分も何か言わなければ」という焦りや義務感のような感情から始まったのかもしれませんが。しかし、発言を終えた後には、不思議と充足感がありました。誰かの発言に自分の思いを返していく。自分の思いに誰かが反応してくれる。そこに、“人とつながっている喜び”を無意識に感じ取っていたように思います。この喜びを味わった私は、水を得た魚のように積極的に発言するようになりました。むしろ発言したいという思いを抱くようになってきている自分がいました。」(板野中学校全体学習9～11年目 30代男性 IN)

■「何て言ったらいいのかなあとか、自分の意見言ってもいいのかなあ、合っとなかなあとか、そう面も含めて、いろいろそれ以外のことを考えよる子っていうのは、絶対あの場では発言できんだろうし、それが2年経って中学3年生になって、場慣れた部分があれば、周りの環境が変わったのもあって、ちょっと発言してみようとか、自分と向き合って、いや自分はこう思うんやけどっていうことを言えるようになったっていうのはあるから、3年間通して意識が一緒かって言われたら、一緒ではない。」「中学校3年間で、3年間全部全体学習せんでもいいと思うん。正直な話。1年生から2年生の2学期ぐらいまでは、スピーチだったり何だっりの練習とか、そんなんをして、意見をみんながある程度言えるようになってから、2年生の3学期に初めて全体学習やって、3年生の2学期にやって、別に2回でもいいと思うよ。無駄に3回も4回もするよりも、中身の濃い授業を2回した方が、絶対ためになると思うから。でもそれは、先生も、その当時の先生も、義務としか思っていないと思うわけ。」(板野中学校全体学習10～12年目・人権を語り合う中学生交流集会 20代男性 KY)

発言できる子もいれば難しい子もいる。すべてが発言できなくてもよい。発言できないからといって責めを負う必要もない。リーダーとフォロワーがいてよいのである。また今回発言できたからといって、次回も発言できるとは限らないし、今回発言できてなくても、次回は発言できる子もいる。同様に、教室で発言できても学年全体になれば発言できない子もいれば、教室で発言できなくても学年全体になれば雰囲気でも発言できてしまえる子もいる。日替わりヒーローやヒロインが出てきてよいのである。

これまで多くのケースを見てきたが、生徒の実態は実に様々であり、一概には言えない。1年生の時から積極的に発言できていたから3年生も、それ以降も人権について熱心に取り組んでいったかといえば、そうでなかった子もいれば、中学生時代に1度も発言したことのない子が、大人になってから人権問題を熱心に捉え、考えるようになったケースも報告されている。

授業を成立させようと思うあまり、教師は必要以上に発言することを求めてしまいがちになることがある。

かつて私は、「〇人以上発言すれば、今日の自主勉強は免除」とクラスの生徒に課題を課し、はっぱをかけたことがあった。人権感覚としては本末転倒といってよい。しかし、実際に達成できたことをきっかけにして、それ以降、クラス全体が積極的に人権学習に取り組むようになった。

ところが、翌年受け持った学年のクラスで同じ課題を課すと、「人権学習の発言を、自主勉強免除というエサで釣ろうとするやり方はおかしい」と、生徒からクレームが付き謝罪したことがあった。結果として生徒がどう変わったかということが大切なのであって、きっかけはさして問題ではないが、クラスや生徒の実態を十分に把握したうえで、自然に学習に参加できる仕掛けを教師が創意工夫することが必要だということである。グループ学習やペア学習、ホワイトボードミーティングやKJ法、グループ発表やプレゼンテーション、様々な授業手法を活用することで、発言をしなく

ても、親しい友達が代弁してくれることがあるし、授業参加したという実感は得られる。力のある子もいれば、まだ力のついてない子もいる。今咲く花もあれば、卒業してから咲く花もある。それが子どもであり、教室である。発言が義務になれば形となり、熱は失われ、人にも自分にも響くことはない。教師が焦って生徒を追い込み、強要や強制を迫るのではなく、自然に成長できていけるような手立てと評価を、教職員が協働的に創意工夫し実践することである。

また、学年の発達段階を考慮に入れられず、それまでの経験値で、「これくらいはできる」と思い込み、生徒に発言を迫ってしまうこともある。1年生は小学校での取組の影響がダイレクトに出る。2年生は落ち着き始める発達段階で、1年生時のような勢いは影を潜めがちになる。3年生になると最上級生ということもあり急激に大人びた発言をはじめ。これらの傾向を無視して生徒に無理な要求をすると、生徒間や教師と生徒間にひずみが生まれてしまう。焦らずに見守る姿勢を大切にしたい。しかしこれらも経験値であり、すべての学年に必ず当てはまるとはいえない。繰り返し繰り返し実践を重ねていくことである。その度にチャンスは増し、自分がホンモノであるかどうかを試されるのである。人がいつ開花するかは誰にも分からない。あくまでも、その学年や生徒の実態を十分に把握し、無理を課さないことである。

ただ、「言うつもりで来た」「言いたいことがある」という強い意志を把握しつつも手が挙げられず、生徒から縋るようなまなざしを向けられることもある。そのようなときは、背中を押す意味はある。それは強制や強要とはいわない。それでもし言えなくても、「次また頑張ろう」とポジティブフォーカスで勇気づけをしていくことである。いついかなるときも、誰に対しても、その姿勢は大切にしたい。(【間をつなげる5つの取組】「③授業は生徒がつくる」も参照)

⑤発言が発言を生んでいくような言葉がけを

一人の生徒が発言を終えたあと、すぐに授業者が応答してしまうことがあるが、これでは生徒同士を発言でつなげることにならない。生徒と授業者の一对一対応になってしまう。授業者は、一人の生徒の発言が他の生徒の発言を生んでいくような言葉がけをすることで、生徒同士が発言でつながっていく授業展開を心がける。授業者は、敢えて多くの言葉を挟まない。授業の主体者は生徒なのである。

■「人の話を聞く楽しさは、道徳のおかげだと思います。人の話を聞く、色んな意見を聞く楽しさを知った事は、今の自分にとっても生きてる事だと思います。(応神中学校合同人権学習5年目・人権を語り合う中学生交流集会 20代男性 FT)

■「発表を引っ張ってくれる子がおって、そこに乗って話ができちゃうとか、乗って話ができちゃうと、自信がついて、ほなもう一回発表しようとか、もうあと時間がないんよなっていうときにみんながバーって手を挙げるっていうのは、すごく自分に自信を持ってそうな空気がある。それから受け入れてくれるっていう、共感してくれるっていう雰囲気がある、それがいい方に動いたときには、そういう雰囲気が醸し出されて後半になると発言が出てきたり。誰かの発言につなげていこうとする、それから自分が言うたことに対して誰かが言うてくれるとかいうことで、共感してくれたなとか、自分の話がここで生かされたなとかいうようなことにつながって、思いきって発表できるとか。誰かの、さっきのつながりのある子に対してなんかしたいとか、でもそれはなかなか言葉にはならんやけども気持ちで発表できるとかいうようなことで、その後また他の先生方も、あの発言すごい良かったなとかいうので、自尊心高めるじゃないけど、いいように言うと、そんな場面もあったな。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 50代男性 S教員、人権を語り合う中学生交流集会 40代男性 H教員)

つなげたいのは、生徒同士である。授業者と生徒ではない。思いを言葉にのせて、ダイレクトに生徒同士をつなぐには、発言の合間に授業者が不要な言葉を挟まないことである。授業者は、授業がうまく流れるように、発言者が孤立しないように、沈黙の時間ができないようにと、生徒の発言の度に言葉を返し、一对一対応になりがちになる。しかしそれが逆効果となり、孤立しないように言葉を返そう、つながろうと手を挙げるタイミングを図っていた他の生徒の思いをくじいてしまうことがある。生徒の発言が発表会形式でなく、つながりが期待できるように、「今の発言についてど

う思いますか」に類する発言を繰り返すよう留意することである。ただし、授業者も発言者の一人として思いを語る場面はあって良い。

⑥発言は「良き評価」と「具体」で

発言の中身は、生徒それぞれである。中身が薄くても、発言するだけで精一杯の生徒にとっては、大きな一歩である。また発言の中身は素晴らしいが、日ごろの生活と結びついていないという生徒もいる。授業をしていて複雑な思いになることもあるが、発言しているその瞬間の生徒の思いとして素直に受けとめ、評価し、これからの姿に期待をかけ励ます。

めざしたいのは、身近で具体的な内容による話し合いである。遠くの抽象的で観念的な話し合いでは、自分ごとの話し合いにはなっていない。そのためにも、自分を語る、自分の中にある本当の思いを語り合うことである。そのことを通して、互いの知らなかったことを知り合い、生徒間、教職員と生徒間の心理的距離が縮まり、学年団の絆が深まっていく。抽象でなく身近な具体で話し合うことである。

- 「例えば自分と部落差別との関わりに気がつかんかったけど、もしかしたら自分の中にある不安感とか、人を見る目とかがそこにつながってんかなと思ったらしゃべれる。それ聞いて自分もそうやと思うところからしゃべりはじめれると思うんよね。最初からポーンとしんどいところしゃべれっていうのはしんどいと思うし。だからそれを先生が、段階を追って、例えばこの教材では歴史の中で歴史を学ぶことによって、自分の中にも不安感からくる人への偏見みたいなあったわとか、人から無意識に聞いて、こんなふうに思うてしまったことあったわって言えるような教材ですね。このことをしゃべらせれたらいいねって先生が教えてあげられる。みんな求めると思うの、人権問題学習で、どの教材でどういことを子どもたちがしゃべればいいのかっていうのは、教員特に若い先生分かんないと思うのよね。私たちの年齢ができることって、そんなことかなって思うのね。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 50代女性 F教員)
- 「あの時は、何も考えず、感じたことをそのまま発言したり、その言葉を聞いて、賛同したり、なんていうか、私は、こんな体験をしたというのを教員や生徒の関係を越えて、感じた矛盾や悲しみや怒り、いろんなものをぶつけ合ったと思います。身近な家族から差別的な発言をきいた、兄弟姉妹が結婚するときに周囲からの反対があった、自分の家族が差別にあっていて、等々。自分だけ悩んでいるのかと思うとそうではなく、同じようなことで悩んでいた、全体学習をとおして、実はそれが相手を傷つけたり、差別をすることであることに気付いた。気付いて、同学年の意見を聞いて、自分で考えて発表することで、自分のこととしてどうしたらよいかということぶつけることのできる場所だったように思います。」(板野中学校全体学習1～2年目 30代男性 IH)
- 「私は京都に〇〇先生に連れていってもらって皆で話してきたけど、そのなかでの私の発言で友達を傷つけてしまって、今でもその時のことは思い出すとしんどくなるけど、でも事実を話して、その事実はすごく残酷で、こんなに全体学習してきても厳しい現実があるってことを思い知らされた。でも、こういう全体学習をしてきたからこそ、その残酷な事実をおかしいことやと思えたんかな。全体学習がなかったら、おかしいことにも気づけずに、自分も偏見とか何か間違った考えを持った人の考えに流されていたと思うなってあの時は思っていた。」
「あの時京都で語り合った友達とは、傷つけてしまった友達も含め、今でもたまに会っています。私達の関係は何も変わりませんでした。」(板野中学校全体学習8～10年目 30代女性 UC)

発言の中身は生徒一人ひとり様々である。ポイントになるような発言はあるにせよ、どの発言もその生徒にとっては重く貴重なものである。授業者は発言者に対してもっている感情は差し引いたうえで、絶対的に発言者を評価しなければならない。いかなる状況においても、ポジティブフォーカスで評価することである。

教材や資料から抜け出せず、その中で授業が進められることがある。しかし本当に学ばせたいのは、教材や資料を通して、今の自分はどうかということである。そのためには、教材や資料に関連して、「今・ここ」の具体的な課題について語り合うことが必要となる。具体的に見えない、抽象的・観念的なところで討議をしても、それは人には響かないし、ヒトゴトの域から脱することはできない。人権学習は、ワガコトに近づいてはじめて響いてくるし、本当の意味で理解が深まるといえる。その意味において、この学習における語り合いは、授業計画はあっても筋書きのないライブの

ようなものといえる。

⑦生徒に託し委ねる

生徒が話し合いをしているとき、誰かを責めたり、強制的に発言を求めたりして場の雰囲気が悪くなることがある。授業者としては拙速にたしなめたくもなるが、生徒の中からバランスをとる発言が出ることを信じて待ったり、全体に問い直してみたりすることを心がけたい。さらに雰囲気が厳しくなるようであれば、授業者は、この時間、何を大切にしようとしている学習なのかを再確認させる。

(集団(チーム)が良くなる5つの言葉) ごめん(謝罪:謝る), どんまい(許容:許し), ありがとう(感謝:感謝),
がんばろう(激励:励まし), ナイスプレー(称賛:褒め)

- 「子どもが子どもを責めたり、子どもが大人を責めたりっていう場面がたくさん見られた。それは自分が学校現場で、それはもちろん例えば運動の一つと捉えれば間違いなく合うことなんだろうけど、差別解消に向けての運動というか、大きな流れとしては間違っていないんやけども、学校という場で心がじわじわ育っていったらいいぐらいの中学校という成長過程の中で、それが大学生になると違うと思うんやけど、中学生という多感な時期に自分の思いをぶつけることは悪くないと思うんやけど、それで人を責める人が出てきたっていうところに、どこかで違うぞって思うところがあった。」「頑張れない人にとって居づらい場所?になっていくせこさはあったと思う。二分化とまではいかなのやけど、何となく言えた人、言えなかった人みたいな、きっちり二分されとるわけではないんやけど、なんとなく。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 50代女性 F 教員)
- 「さっきSG先生が言ったことにつながるんですけど。「おい、何寝よん」ていうんを言うのは、横の立場したら、ものすごい言いにくいじゃないですか。特に力関係を考えると。「コイツに言うか」という場面もある。けどそれを超えて、いやお前これはアカンやろと言ってくれる人間が一人でも増えるって幸せなことかなと。膝を叩いてくれる、お前行き過ぎやぞって。そういうつながりっていうのは大事なんかなと。自分にストップかけてくれる人間がおるっていうのは、自分が行き過ぎたときに、お前これは行き過ぎやぞって。逆にコイツが困ったら、防がな、助けようという手が出たりとか。それは誰かが発言したらそれに続けて発言するっていうのも、そうかなと。「孤立させないようにしようぜ」みたいな。そういうことにつながっていくん違うかな。仲間づくりのなかで。」「切り込むことが、全体学習の意義やと思うんですよ。これ、クラスの人数では受け止められないけど、もしかしたら学校全体だったら受け止められるかもしれないって思うんですよ。自分はさばけないけど、さばける生徒はいるかもしれない。(教師は拾えんよ)拾える可能性のあるやつがおるんですよ。スーパーエースが。(中略)子どもら同士で解決せなあかん問題やと思うんですよ。ホンマはね。つきあってる集団に、我々が参加させてもらってるだけで。いろんな圧力は感じますけどね。ネガティブな部分だけ取りあげられると、腰は引けますけどね。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 50代男性 S 教員, 人権を語り合う中学生交流集会 40代男性 H 教員)
- 「②教師と信頼関係ができていない生徒 全体学習の発表の中で、教師に対して反発的な発言や行動をとり、場の雰囲気を壊す。「教師をやめろ」という発言を受けた。学校生活でも反発が強く、いすを投げられたことがあった。また、ほとんど教室に入らない生徒は、全体学習に参加しても、聞いてはいるが寝ていたり、きれい事を言っていると感じたりしている。ただ、身近な友達の発言に対しては、真剣に聞いている場面もあった。」「①生徒に対して 生徒数が200人の中で、一人の生徒が自分の苦しい立場(親の離婚やDVのことなど)を発言したときに、一人一人の生徒がどのように受け止め、どのようにその一人に接していくのか、フォローしていくのが教師にとって難しい。クラスの中でも、担任としての発言のみで終わり、個人的にフォローできなかった。友達同士では、いろいろなことが話せているようだったが、全体学習のあとの感情が見えにくい。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 40代女性 I 教員)
- 「「差別をしてはいけない」「人権侵害をしてはいけない」というのは大前提としてありますが、してはいけないことを探して指摘しあうのではなく、現実に日常生活に差別や人権侵害が生じることがある意味前提で、誰もが「差別する側」「差別される側」になり得る。それをどのように共有して、解消して、よりよい方向に進めていくかの積み重ねであると考えています。そのことがまさしく「全体学習」に込められていると感じているからこそ、『全体学習』を体験したことが根幹にあると感じている』と言えるのです。」(板野中学校全体学習2～3年目 30代女性 OC)

これまで「集団で語り合う人権学習」に取り組んできたなかで、厳しい場面に直面したことがあったことも事実であ

る。ワガコトとして懸命に発言を繰り返す生徒が、真剣さの感じられない同級生に対して詰問する場面があった。人権学習に対して逃げ腰な姿勢を教師に感じ、批判的に問い質す場面もあった。それまでの学級での取組がどうであったのかを検証したうえで、学年団として共有し、協働性を生かして対応していくことが課題であったのであるが、そこまで至らず、一部の生徒や教職員がづらい思いをしてきたこともあった。そうならないためにも、「集団で語り合う人権学習」の実践において、教職員が協働力を発揮することは欠くことができないことといえる。日ごろの学級経営や授業実践がどうであるのか、生徒の状況把握を常に全体で共有化しつつ、「みんなで取り組んでいる」という安心感が感じられるからこそ、「集団で語り合う人権学習」の実践は可能となる。

厳しい生徒実態に対して教職員の力量が弱いと、生徒と教職員のバランス関係は崩れ、学年経営は難しくなる。教職員の力量が高ければ、生徒実態が厳しくても成果はあがる。つまり、生徒実態と教職員の力量のバランスを図ったうえで、リーダーシップを発揮できる教職員がいて協働力を発揮できる状況があれば、生徒実態に関係なく、「集団で語り合う人権学習」は可能といえる。逆な言い方をすれば、そのバランスが図れない、リーダーシップを発揮できる教職員がいない、協働力が発揮できない状況があるならば、可能とはならない。しかしながら、人権学習が十分でなかったからこそ生徒実態が厳しくなってきたわけであり、生徒実態が厳しいならばなおのこと人権学習は必要であるといえる。やはりどこかでリーダーシップを発揮する教職員が出てきて、協働力を発揮する学年団となっていくことを期待したい。

また、「集団で語り合う人権学習」の実施が可能な状況があったとしても、教職員に授業者になることを無理強いしないことである。仮に授業者になったとしても、うまく授業が進められないこともある。そのときは、自分で背負い込まないことである。授業者が背負い込んで、一人で立ち回ろうとし、却って自分の首を絞める場面を多く見てきたし、自分もそうだった。その場にいる生徒や他の教職員に託し、委ねるくらいの気持ちで臨むことである。「集団で語り合う人権学習」の実施が無理な状況ならば、行われていないはずである。行われているということは、実施できると学年団全体が判断したわけであるから、学年教職員みんなで背負うことである。もし場の雰囲気が悪くなるようであれば、信じてあらためて全体に問うことである。生徒や他の教職員から見たフレッシュな視点からの思いがけない発言が、授業者のみならず、授業全体を窮地から救った場面も数多く見てきた。

⑧つながりを見つけ出しつなげる

話し合っている内容が授業の流れから逸れていると感じることがある。そのとき授業者は、話し合いの流れを強引に軌道修正するのではなく、逸れていると思われる内容のなかに、その時間の目標や資料、主題、またこれまでの学習や取組、学年目標とつながっている部分はないかを見つけ出し、生徒に提示し、学習内容とつなげるような流れをつくる。

授業計画は立てているものの、授業を進めていくなかで生徒発言の影響を受け、その流れが変わってしまうことがある。計画通りに流れを強引に引き戻そうとすることで、授業の流れが不自然となってしまうこともある。たとえ授業の流れが逸れてしまったとしても、目標や資料、主題やこれまでの学習、取組、学年目標とつながっている部分はどこかにはあるはずである。それらとのつながりを見つけ出し、授業展開を進め直していけば良い。授業計画に縛られすぎのではなく、そのときに出てきた生徒の声を大切に生かし授業を進めていくことである。

⑨好循環の拍手を

頑張っって発言した生徒には自然と拍手が湧き起こってくる。ところが、なかには雰囲気を壊すような、質の悪い拍手が起こることがある。これは、質の悪い「笑い」と似ている。拙速にたしなめるのではなく、そのことについてど

う思うか、全体に考えさせる。拍手は好循環の潤滑油となるようにする。

「集団で語り合う人権学習」や人権学習をしていると、発言に応じて自然と拍手が湧き起こることがある。それ自体は喜ばしいことであるが、拍手することが惰性となり、どんな発言にも拍手をするようになってしまうことがある。また、ふざけて拍手し、目立とうとする生徒もいたりする。本来拍手は、賞賛や感謝、励ましや賛同の意味で行われる行為ではないだろうか。それが惰性やふざけになってしまうと耳障りになり、何とも居心地の悪い空間になってしまう。本来の拍手の意味を捉えさせて授業に臨ませたい。

また、授業の流れによっては、「笑い」が起こることもある。それが耳障りの悪いものでなければよいが、なかにはあざけるような「笑い」がこぼれることがある。差別することの愚かさを笑うことは認められても、人を見下す意味における「笑い」は放置するわけにいかない。「笑い」についても、その意味について捉えさせて授業に臨ませたい。

⑩省察とこれからへのつながりを共通認識

授業の終わりに、授業者から本時の学習の省察とこれからの学びへのつながりについて話すことで、学年全体の共通認識を行う。

また、本時の学習で思い考えたことについて、生活記録や生活ノートなどに省察を記録するよう促す。その後、言語化された記録を通して、生徒それぞれの内面を把握し、学年教職員で共有化を図る。授業内容や生徒の記録を活用し、授業についての評価を「学年人権だより」等に掲載して生徒や学年全体にフィードバックし、学習効果をさらに確かなものとして次時の学習につなげる。

■「高校卒業してから尼崎に住んでるんですけど、もっと同和差別にギスギスしててね。在日や在韓多くて、『今(社会人になって)』『ようやく』討論する理由・重要性が分かりました。K先生や吉成先生の熱さは何故？っていうのは、社会に出てからです。これが同和問題を知らず、当事者被害を受けてなく、親友にカミングアウトされた他人事のような立場で全体学習に参加していたパターンの一人の感想です！」「懐かしい歌聞けば当時走馬灯のように思い出されます。でも三日前の出来事覚えてません。コレ、記憶じゃなくて『感動』で心に響いてるからなんですよ？」「偉そうに答えた分、僕も頑張りますわ！」(板野中学校全体学習2～4年目 30代男性 OH)

■「同和問題だけではなく、普段の生活でもそれは同じで、社会に出てからもその時の活動は活かされているように思います。人と繋がりややり取り、なかなか上手くいかなことの方が多のですが、同和問題学習に取り組んでたお陰で、自分を素直に出せて分かり合おうと努力出来てるように思います！中学生の頃に真剣に同和問題に取り組んでなければ、自分に自信が持てず、綺麗事しか言えない大人になっていたかもしれません。現在は同和問題に関わることは無くなってしまいましたが、いつまでも差別と言うものは無くないのでしょうか？人が生きてるかぎり、人と差をつけなければならぬのでしょうか？その問題ははまだ自分のなかでは解決できずにいます。永遠の課題として抱えて生きていくことになるだろうけど、重くは考えず、あのときの活動で培った経験を活かし、自分らしくをモットーにのびのびと生活していこうと思います！」(板野中学校全体学習5～7年目・人権を語り合う中学生交流集会 30代男性 AK)

■「しあわせの定義って、人それぞれですが、私の場合は、お金持ちになる事、お腹いっぱい食べたり贅沢する事、いろいろありますが、やはり自分も含めて、大切な人や自分にかかわる周りの人、あわよくばかかわってない全然知らない人までも、みんなが心底笑顔でいられる事が、私の場合の一番のしあわせである気がします。いろんな価値観や考え方が入り交じる人間社会だからこそ楽しい。イヤなこともあるけど、イヤなことさえイイことに見えるラッキーをねらって、イイことにひっくり返そうとする感覚。人生を楽しもうとする感覚。故郷、板野町のたまたま行った学校教育で、土台を作っていただきました。板野でしてくれた教育が全部正しかったとは思いません。いろんな場所や地域で本気にさえなればいろんなジャブが打てると思っています。部落差別にとらわれず、部落差別について考えられる感覚のような、人間関係、コミュニケーションの楽しさ。誰一人排除しようとせず、スクラム組んでいける感覚や空間を広げられたらと思います。そして、もっとお互いを尊重しあう風潮が広がれば、少なくとも今よりはじめや差別、ネットでの中傷、犯罪は減ると思います。道徳心を広げて、もっといい社会や地域・学校にせなにかんと思いました。34歳の農業しよるおっちゃんですが、教育の大切さ、すば

らしさを実感しています。先生や保護者、生徒みんなで学ぼうとする空間、今の社会の中でやっぱりもっと広がってほしいかなと思いました。」(板野中学校全体学習5～7年目・人権を語り合う中学生交流集会 30代男性 K T)

■「先生たちが作ってくれたあの時間は今もあるのかなって時々皆で話すこともあるんです。自分の子どもが中学生になったときも、あの授業をしてほしいなって思います。意味はすごくあったなって、今となって思います。」(板野中学校全体学習8～10年目 30代女性 U C)

■「差別を許さないということが徹底的に教え込まれてよかった面もあるが、一方で家族関係が悪化して、精神的にきつかった。」(板野中学校全体学習8～10年目 30代女性 S Y)

■「同和問題自体が、中学生にとっては分かりにくいものであったし、子供ながらになんとか口に出しにくいという雰囲気があり、全体学習の時間がいやだなあと感じたことも多分あったと思います。しかし、今思い返せば、そういう時間があってよかったなあと感じています。なぜならば、全体学習の場では、自分のことをオープンに話せて、それをみんなが受け入れられるという体制が整っていたからです。そういう場所がなければ、私は未だに、同和地区の人に対して「触れてはいけない」気持ちを持っていたかもしれませんし、その人がもつ心の悩みに対して全く理解できなかったかもしれないからです。同和問題は目に見えないからこそ、その人の内に持っている問題が分かりにくく、解決も難しいのだと思います。現在私は関西に住んでいますが、同和地区に対する偏見はたまに耳にして、複雑な思いになることがあります。もっとそのような問題がオープンで、みんなが自分の問題として考えることができたなら、そのような偏見はもっと早くなくなっていくのではないかと思います。また、私は仕事で心や身体に障害を持つ人と日常的に関わっていますが、関わる前と後では、その人たちに対する思いが全然変わってきたと感じています。その人たちがもつ悩みに気づくと、その人を差別しようという気持ちなどいつの間になくなっていくのです。最近では、障害を持つ人や同性愛の人など、様々な人が自分のことをオープンにして積極的に社会に出ていると感じます。そのようなことは、社会にとってはとても大切なことだと思いますし、同和問題も同じような形でオープンに語られるべきだと考えています。中学生の頃は、色々思うことも多く、たくさん理想も語っていましたが、なかなか思うように具体的な行動を起こせずに、ただお茶を濁してしまうような一面があるなあとありますが、それでも、当時の仲間と語り合ったことは、今でも大切に覚えていますし、そのような熱い気持ちを忘れずに、日々頑張っていかなければとも思っています。全体学習のような取り組みが、様々な所で広がり、みんなが自分のことをオープンにできる場所が少しでも増えればと思っています。」(板野中学校全体学習8～10年目 30代女性 N N)

■「今職場で、人を惹きつけて話すのが上手と言われるのも、きっとあの時、全体学習で身につけたものが、大いにあると思います。同僚や職員だけでなく、患者さんとのコミュニケーションをとる時も聴くこともそうですが、自分のことを話すと言うことに躊躇しないのも、あの時に慣れていたのでだなと感じます。」(板野中学校全体学習8～10年目 30代女性 M D)

■「大きくなるにつれ、世界、知識が広がっていくと、さまざまな差別を実感させられるようになりました。大学で知り合った子や社会人になり知り合った人が平然と差別用語を口にしたりして、なぜそのようなことを口にしなければいけないのかと悲しい気持ちになることがあります。私は、他人と差別することの理由が理解出来ません。差別をする人は他人より優位になりたい為にするのかもしれませんが、それにどれ程の得があるのかと思えば腹立たしくもあり切ない気持ちになります。それと、私が誹謗中傷をされてもなんとも思いません。人にはどう思われようが、自分は自分であり、私には友達、家族(仲間)という味方がいます。私の性格の問題かもしれませんが、それも全体学習で教室や体育館、京都など、たくさんの仲間と討論しあったことで、形成された事だと思います。全体学習では人との関わりを学び、人を区別するのではなく、話し合いによってその人のことをより深く知ろうとするようになったといえます。なので、人を偏見で判断することは絶対にしなくなりました。どんな人でも短期間で“こういう人だ”とは決めつけず理解しようと、全体学習により学び、現在の私の考えになったといえます。」(板野中学校全体学習8～10年目 30代男性 M S)

■「全体学習が私にもたらしてくれたものは、“弱い自分と向き合う”意識です。自分の中の差別意識や卑屈さと向き合い、それをさらけ出す勇気と覚悟は並大抵のものではありませんが、前述のような人とつながり語り合う活動の中で、それぞれの悩みや思いに互いに共感し心を開いた付き合いができるようになったように思います。“相手を知るにはまずは自分から”このような意識が私の中に自然と芽生えてきました。そしてそれは、人とかわる上で今でも心がけている言葉でもあります。」(板野中学校全体学習9～11年目 30代男性 I N)

授業の終わりには、その時間に学んだことについてのまとめをしておきたい。そしてぜひとも、そのあとの生活や行動、学習や活動とのつながりを明示しておきたい。たとえば、放課後や家庭での過ごし方、テスト前ならばテスト勉強と向き合う意識とその時間の学びとの関連性について。その時々で、そのあとの学習や活動とつながる部分も多くある。そうすることで生徒は、人権学習が他の様々な生活や行動と別個のものではなく、つながりのあることだと捉えることができ、人権学習が特別な学習でないという意識につながっていく。このつながりを得るかどうかは、人権学習が汎化

できるかどうかという点において大きい意味がある。

また、生徒が学びとったことをその日のうちに生活記録や生活ノートに記録することが、自分の思いを活字に表すこと、表現力を高めること、文章力を高めること、学力を高めることにつながっていくことも示しておきたい。教師としては、記録や授業内容を活用した学級通信や学年通信、人権通信の作成を勧めたい。生徒のなかには、学習したことが音声で入ってくる者もいれば、活字として入ってくる者もいる。通信という形で生徒にフィードバックし、評価し、生徒の人権学習へのやる気やプラスイメージにつなげ、次時の人権学習への意欲につなげたい。この循環が、人権学習の文化が学級や学年に定着することにつながる。

授業の終わりに行う共通認識は、前述したような短いスパンとしての内容と、この後に述べるような長いスパンとしての内容といった、両面のアプローチが必要である。

「集団で語り合う人権学習」に取り組んでいけば分かってくることであるが、年を重ねるごとに生徒の実態に合わせて微調整し、その取組を進化させていくことの必要性に気づく。板野中学校での全体学習における初期の世代と、10年後の世代では、その取組の中身、生徒に求めた学習内容の濃さはまったく違っている。生徒も違えば学年教職員集団も違うので当たり前の話ではあるが、それだけすべてにおいて一律に同じではないということである。そのなかでも、生徒実態と教職員集団とのバランスによってうまくいったように思える学年もあれば、残念ながらそうでない学年もあった。長年在籍して取り組んだ教員には、年々新たな知見が生まれ、改良と更新が繰り返されてきた。初期のころは、「熱」はあれども、どんよりと重苦しい授業であった。そこには、それだけ厳しい差別があったからであるが、それがいきいきと笑顔で語り合う授業へと変わっていった。それは、「差別は重く厳しい現実ではあるが、差別をなくそうとする取組は重く厳しいものではなく、明るく楽しく、人を惹きつけるものでなければならぬし、そうありたい」という方向性へと変わっていったからである。もちろんそこには、単に明るく楽しいだけではなく、人権という芯が通っていることが前提となる。教師としては当初、一時間一時間の授業計画でいっぱいになりがちであり、それはどの時期においても同じではあったが、授業が成立することがすべてではなく、長く生徒の中に息づいていく学びとは何かを意図に入れて生徒に臨むことも多くなっていったように思える。それは差別の実態や人権の歴史についての学びだけではなく、学習によって自分が大切な存在であるということ、自分とともに同級生の仲間も同じように大切な存在であるということ、発言などの表現することやコミュニケーション力を高めることの大切さ、それによって人と人がつながることの大切さ、学び合い共に成長することの大切さを学ぶことであった。今している学習が、生徒にとって将来どんな力につながっていくのかを、教師自身ははっきりと認識しておく必要があるし、そういう視点で好評価して知らせることも重要な要素であるといえる。

また、差別を今すぐになくしたいという強い思いのなかで、「差別はいつなくなるのか」という議題がのぼることがあった。それは、人権学習が早くなくなることを期待しているようにも聞こえがちであった。しかし、差別を早くなくすことと、人権について学習することとは分けて考えなければならない。つまり、人権については一生涯考えていくものであるという視点に立てば、人権学習はなくすものではない。となれば、人権について考え、取り組むことが「楽しい」と感じられるような学習になっていかなければならない。差別的な発言を繰り返す家族に対するアプローチについても同じである。それが過度の負担にならないような方向性もてるようになるまでに多くの時間を要した。そういう学習になっているのか、しようとしているのかを考えながら実践を積み重ねることも必要な要素といえる。

⑪「熱」を!

この学習で最も重要な要素は、「熱」と考える。どのような人権課題を考えると、必ずその根底には理不尽な差別や、許すことのできない人権侵害が存在する。「もし自分であれば…」という当事者意識を忘れることなく、人権侵害に対する「熱」を学習の中でしっかり伝えていきたい。

また、熱すぎるとやけどをするし、ぬるすぎると風邪をひいてしまう。受けとめる側の生徒の感性はさまざまで、熱いと感じている生徒もいれば、ぬるいと感じている生徒もいる。授業をする教師側の温度にも個性があり、熱の出し方もさまざまである。すべての生徒に合わなくて構わないので、それぞれなりの「熱」を生徒にはっきりと伝えることである。教師自身も、本気で生徒に語りかけることである。

- 「熱い思いは伝染する。ただその速度には人によって違いがある。胸に悩みを秘めている子ほど炎はつきやすく、燃え続ける。」「当然のこととして、こちらに熱い思いがないと生徒たちは心を開かない。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 60代女性 Y 教員)
- 「何を求めて全体学習をしたのかはこっちが訊きたい。必死だったんだろうなということは伝わってた。だから必死になれた。先生が対等に降りてきてくれたことが大きかった。他のこと(生徒指導や部活動や進路指導)は上からで指導みたいな感じだから、一緒に並べられたら何ともイメージが分かりにくいかもしれないけど、人間対人間のつき合いとして向き合ってくれるから、向き合おうとしたと思うから、それが人権教育だから分かりやすかったと思う。教員側の姿勢というか。でも、「お前や何も分からんから教えてやるぞ」みたいな感じだったら、人権教育でも。正解があるようでないし。」(板野中学校全体学習 4～6年目 30代女性 AZ)
- 「先生の目がこちらに向き再び期待に応えようと、何か喋ろうと考えたりする事もあったが、それが苦痛な時もあった。また、消極的な子は全体学習や授業がとても苦痛で、休み時間に嫌だと言う声もあった。少人数(友達内)でなら意見も出せるが、クラス内でも発言するのが苦手な子はいた。そういう時に先生のように熱く語りかけるのは引かれてしまうし、うまく言えないけど気まずい時もあった。」(板野中学校全体学習 8～10年目 30代女性 NE)
- 「中学生という何かと多感で不安定な時期に全体学習に出会い、私自身救われたというのが率直な思いです。当時の先生方の熱のこもったご指導はもちろんですが、何より全体学習そのものの存在が私の心の奥底に眠っていた自分を揺り動かしてくれたように思います。」(板野中学校全体学習 9～11年目 30代男性 IN)
- 「そこまでせんといかんものなの？それは、人権問題云々の話ではなくて、全体学習というものをそこまでせんといかんのか、わざわざ時間を割いて、机やイスを運んで、そこまで手間暇をかけてせないかんもんなんか、だったらもっと違うことをしたらいいんじゃないの、効率的じゃないんじゃないのって、その当時は思ってたし、たぶんそれが自分だけじゃなくて、他の生徒もそうだったから、ものすごい空気が重かったよね。」「ただ、一緒の部分で言えば、真ん中にだけは行きたくないなと。そこは3年間持ち続けたけど、でもそれは正直、今思えば、担任にもあったんじゃないかって思う。ぶっちゃけて言うと。その当時は思わなかった。自分のことしか考えてなかったから。けど今その情景を思い浮かべたときに、少なからず、先生やって人間なんやから、そんなしたくないだろうし、したいって先生もおるかもしれんけど、どうせだったら周りで見ときたい。その分気が楽だし。だから、先生自身も、少なからずあったん違うかなって。ただ、胸張って否定できる人はおらんと思う。耳の痛い話かもしれんけど。やっぱりそこを見とる。見とるって言うか、無意識のうちに感じとつとる部分はあったんと違うかな。だから3年間を通して担任の先生も変われば周りも変わるから、自分という人間自身も変わるから。まあ、最後の方はあんまり嫌ではなかったよね。」(板野中学校全体学習10～12年目・人権を語り合う中学生交流集会 20代男性 KY)

人権学習、「集団で語り合う人権学習」に取り組むうえにおいて、他の何を削り落としても残る必要な要素は、「熱」と考える。「集団で語り合う人権学習」やグループ学習などのどんな手法に取り組んでも、生活ノートや学級通信などのどんな手立てを尽くしても、そこに「熱」がなく形だけのものとなってしまうと、それは有効に働いていかない。仮に難なく実践が進んでいったとしても、熱い思いが湧きあがってくるような人権学習にはならず、表面をなぞるだけの空々しい実践にしかならない。そしてそれは、人の心に響いていかない。このような学習を確実に成功させるための科学的な論拠を考えに考えたが、結局は科学的な結論にはたどり着けず、非科学的な「熱」という結論に至った。しかし、どう考えても、人権学習、「集団で語り合う人権学習」を成功させる秘訣は「熱」と言わざるを得ない。逆の言い方をすれば、「熱」さえあれば、大方のことはクリアできるのではないかとすら思える。ただ、「熱」の出し方は教師によって様々であった方がよい。生徒のなかには、熱く迫られることで意識の変容につながる者もいるが、そういう生徒ばかりではなく、静かにじんわりと迫られる方が居心地の良い生徒もいるからである。教師それぞれなりの「熱」がどれも否定されることなく、互いの「熱」が尊重されることである。

「水平社宣言」の最後に「人の世に熱あれ人間に光りあれ」とある。まさに、その「熱」である。ここでいう「光」

は、「熱」にもとづいた「光」だということである。「熱」と「光」は同列ではなく、「熱」から発せられた「光」だということである。

⑫すべての教職員で

教師にも生徒にも個性がある。学級担任をしているすべての生徒との相性が合えばいいが、必ずしもそうなるものではない。相性の合う生徒もいれば難しい生徒もいる。善し悪しの問題ではなく、個性のなかで起こっていく当たり前のこととして捉え、すべての生徒をすべての教職員で漏らすことなく見とるという意識で取り組む。学年としての協働力を働かし、チームですべての生徒を見とっていくことである。

■「しかしながら、無理もない。病休開けの途中赴任、授業でしか会わない副担。事務的に全体学習の司会をしている人間に、心など開けないのは当たり前である。」「蔭でたくさんの先生方の問いかけや投げかけがあったらうし、私自身にもたくさんの先生にかなりサポートしてもらったことは確かである。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 60代女性 Y 教員)

■「全体学習が広まりそうで広まらなかった一つはやっぱり、自分が持っている力量と求められているものの違いはあったと思う。多くを求めないことだと思う。子どもにも教員にも。あの指導案やってホンマに見つめたもの書けなくてもちょっと、10分考えてみて考えたこと、自分の。なんで人権教育するんかなってという言葉が、どっか一言入ったらいいよな、くらいだったらできるかもしれないしね。」「例えばHPとか、耕されてる子どもの中にはあったと思うのよ。でもそれは耕されている土壌があつてのプラスアルファであつて、学級全体としてパーンと返ってくるっていうものは人それぞれに違うかつたような気がする。例えばKGの人生にどれだけかかわれたかというたら、授業を通じても何通じてもないのよね。今でもどうしようって思うんだけど。私の、今でもずっとずっと心配なのは彼女だけなの。(元気にしてる。去年同窓会で会った)先生だったらあの人権学習のつながりのなかでできるのよ。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 50代女性 F 教員)

■「②教師に対して「教師をやめろ」という発言を受けた時、周りの教師からのフォローもなく、非常に苦しい全体学習であった。学年団のまとまりがあつても、教師に対する暴言をそのままにしてしまうことに、不信感を感じた。管理職にも相談をしたが、クラス毎の担任の温度差を埋めるようにしなくてはならない。クラスでどれだけ担任が、全体学習の予習をさせておくかで、雰囲気が変わってくる。」(板野中学校全体学習・人権を語り合う中学生交流集会 40代女性 I 教員)

教職員集団と生徒実態のバランスが崩れている、教職員集団で人権学習のリーダーシップを発揮できる教員がいない、協働力が発揮できない、このような状況下で「集団で語り合う人権学習」の実践に取り組むことは難しい。どの生徒もすべて守る、どの教師も守る、誰一人として排除しない、といった意識を、まず学年全体で共有する必要がある。その前提があれば、授業者のキャリアや力量に差があつてもサポートし合うことができる。他の教員の素晴らしい授業力を見て自分を責めることもあるかもしれないが、必要以上に自分を責める必要はない。「お互い様」であり、みんな、「いつか来た道」である。まずは、その場に立つことがすごいことであり、素晴らしいことなのである。自分のカラーで自分にしかできない自分なりの授業力が発揮できればいい。もし自分の授業に不出来さを感じるならば、それは財産として次に生かせばいい。それは学年全体の財産になり、次の授業者にも生かされていく。各クラスで学習を積みあげたうえで、統合するものとして学年全体が集まり、「集団で語り合う人権学習」に臨む。そして、授業者それぞれのカラーで、学年すべての生徒を誰一人こぼすことなく見とっていく。その繰り返しと積み重ねの中で、教職員の教師力は向上し、学年団の絆は深まっていく。